

日光生まれの 仙人画家 小杉放菴

反俗・脱俗・超俗!

小杉放菴（1881-1964）は、日光出身の近代日本を代表する画家です。幼い頃から絵画に親しみ、15歳で日光在住の洋画家・五百城文哉に師事したのち、18歳で上京、小山正太郎の画塾・不同舎に入門します。「未醒」と号し、太平洋画会や文部省美術展覧会（文展）に出品を重ね、30歳のときに文展で最高賞を受賞。翌々年に洋画研究のために渡欧したものの、パリで池大雅の《十便図》の複製を偶然目にしたことがきっかけとなり、東洋的画題に開眼します。

帰国後は、再興日本美術院の洋画部を牽引し、東洋的要素を加えた新しい洋画の制作を試みます。さらに、44歳のときには東京大学安田講堂の壁画を手がけ、名実ともに洋画壇の巨頭と目されました。1930年代以降は、「放菴（放庵）」と号を改め、日本画の制作に次第に軸足を移すようになります。

このように、洋画・日本画で独自の境地を開いた放菴ですが、終戦後は東京を離れ、疎開先であった新潟・妙高高原に亡くなるまで過ごします。美術蒐集家としても知られる細川護立が、戦後に「放菴は赤倉に入って仙人になってしまった」と述べたように、これまで務めた展覧会の審査員や、日本芸術院会員などを辞し、一切の名誉から離れた生活を送ったのです。

しかし、この妙高高原での生活は、彼の制作活動をより豊かにさせました。絵画のみならず、これまでも手がけていた書や和歌を精力的に制作するようになります。その独特の書体と飾り気のない句調は、今もなお、見る者の胸を打ちます。

洋画壇の頂点まで登りつめた画家が、どのようにして「仙人」へと変化したのか。本展では、当館が所蔵する絵画・書・和歌を一堂に会し、仙人画家・小杉放菴の全貌に迫ります。

また、本展は、100年ぶりに発見された未醒時代の大作《煉丹》を公開する初の機会となります。どうぞご期待ください。

■ 展覧会概要

会期：2019年9月14日（土）～11月4日（月・祝）

休館日：毎週月曜日（祝日・振替休日は開館し、その翌日を休館）

開館時間：9時30分～17時（入館は16時30分まで）

会場：小杉放菴記念日光美術館 展示室

入館料：一般720（640）円、大学生510（460）円、高校生以下は無料

※10月1日以降、消費税の改訂等に伴い、入館料が変更になる場合があります。

※（ ）内は20名以上の団体割引料金

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料

※第3日曜日「家庭の日」（9月15日、10月20日）は、大学生は無料

主催：公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館、日光市、日光市教育委員会

■ 展覧会構成 (作品は全て小杉放菴記念日光美術館蔵)

I. 洋画壇の頂まで

1881(明治14)年、現在の日光市山内に生まれた小杉^{くにたろう}国太郎(放菴)。二荒山神社の神官であり国学者でもあった実父に歴史や漢学を学び、養父から絵の手ほどきを受ける幼少時代を送りました。15歳のときに、日光在住の洋画家・五百城文哉の内弟子となり、洋画家としての道を歩み始めることとなります。

18歳で上京し、小山正太郎の画塾・不同舎に入門。20歳頃から「未醒」と号し、太平洋画会展や文部省美術展覧会(文展)に出品を重ねます。その傍ら、日光の風景を題材とした外国人観光客向けの「おみやげ絵」や、漫画や挿絵を描き、生活の糧としていました。

そして遂に、1911(明治44)年の第5回文展に出品した《水郷》と、その翌年の第6回展に出品した《豆の秋》で最高賞を連続受賞するという栄誉に浴します。洋画家としての将来を期待された未醒は、1913(大正2)年に、銀行家の支援を得てヨーロッパへ発つのでした。

本章では、彼の初期の作品をならべ、彼がいかにして洋画壇の頂点へと登りつめたのかを追います。

II. 東洋への目覚め

洋画家としての将来を期待され、渡欧した未醒。しかしながら、ルーベンスなどの伝統的かつ写実的な西洋絵画と、マティスやピカソなどの前衛絵画を目にしたことにより、自身の方向性を見失うこととなります。

そんな彼に大きな衝撃を与えたのは、パリで偶然目にした江戸時代の文人画家・池大雅の《十便図》の複製でした。後に「帰り行く道を示された」と述べているように、これが東洋的画題に目覚める大きなきっかけとなったのです。

帰国後は、横山大観らが再興した日本美術院の洋画部に参加。東洋的エッセンスを加えた油彩画を発表し、注目を集めます。その後、次第に日本画へと軸足を移すようになります。

100年ぶりに発見された色鮮やかな初個展の大作《煉丹》をはじめ、記念すべき第1回再興院展に出品した油彩画《^{いんぼ}飲馬》、東京大学安田講堂を飾った壁画の習作をならべ、彼がいかにして東洋的画題に取り組んだのかを探ります。



画像1 小杉未醒《東照宮・陽明門と鼓楼》
1900年代



画像2 小杉未醒《農夫》1912(大正元)年頃



画像3 小杉未醒《飲馬》1914(大正3)年



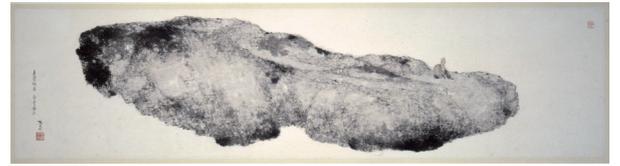
画像4 小杉未醒《煉丹》1917(大正6)年

Ⅲ． 変わりゆく画風 —麻紙との出会い—

大正末期、未醒は画号を「放菴（放庵）」と改め、ますます日本画の制作に打ち込むようになります。これまでは絹本に鮮やかな色彩を用いた作品を手がけていましたが、「放菴紙」との出会いによって、画風は大きく変わってゆきました。

放菴紙とは、越前の紙職人・岩野平三郎が、放菴のために特別に漉いた「麻紙」のことを指します。麻紙は奈良時代に盛んに用いられていたものの、平安時代に楮紙に取って代わられ、大正末期に復活するまでその姿を消していました。放菴紙はより細かい麻の繊維が漉き込まれており、墨がすぐに滲んでしまい、扱うのが大変難しかったとされています。しかし放菴は、この紙と墨が生み出す「偶然の妙趣」に強く惹かれ、いつの間にか彼の制作になくってはならない存在へと変わったのです。

本章では、山水画を中心に、麻紙と墨の「偶然の妙趣」によって生まれた作品をご紹介します。



画像5 小杉放菴《白雲幽石図》1933（昭和8）年頃



画像6 小杉放菴《漁村夕陽》1930年代

Ⅳ． 放菴、仙境へゆく

空襲で東京・田端のアトリエを失った放菴は、戦後、疎開先であった新潟県妙高高原の別荘「安明荘」に定住し、展覧会の審査員や日本芸術院の会員を辞任するなど、一切の名誉から離れた生活を送るようになります。

しかし、この安明荘での暮らしは、彼の制作活動を一層豊かにしました。鳥の何気ないしぐさを切り取った花鳥画や、良寛などの古き良き時代に活躍した人物や、おとぎ話の登場人物を描いた「日本的道釈人物画」など、人々の心を明るくする作品を多く手がけます。その背景には、戦後の荒廃した日本を絵筆の力で明るくしようという、画家としての「使命感」がありました。

また、絵画のみならず、これまで手がけていた書や和歌も精力的に制作します。草書体をもとにした素朴ながらも洗練された書と、安明荘での暮らしや家族について詠んだ和歌からは、彼のすべてのものに対する温かなまなざしを感じ取ることができます。

最終章となる本章では、安明荘という「仙境」で作られた絵画・書・和歌をならべ、彼の晩年の活動を辿ります。



画像7 小杉放菴《閑庭》1950-60年代



画像8 小杉放菴《清風》1950-60年代

■ 展覧会関連イベント（いずれも予約不要、要入館料）

・担当学芸員によるギャラリートーク

10月5日（土）・19日（土）

11月2日（土）

各日とも11時～／14時～（1時間程度）

・音のワークショップ「仙境にひびく尺八の音」

中国から伝来し、日本で独自の進化を遂げた尺八。竹筒に5つの指孔を開けただけのシンプルな構造でありながらも、運指・息の入れ方・あごの角度で音が変化する奥の深い楽器です。このワークショップでは、演奏法をはじめ、譜面の読み方、二大流派である琴古流と都山流の違いなど、実演を交えてご紹介します。

日時：9月21日（土）15～16時

会場：当館エントランスホール

講師：津上弘道氏（琴古流尺八奏者）・奥田愛山氏（都山流尺八奏者）

■ 次回展予告

「生誕150年 吉澤儀造とその時代」

2019年11月9日（土）～12月22日（日）

■ 広報用画像のご案内

展覧会広報用として作品画像をご用意しております。ご希望の場合は、以下の必要事項を明記の上、メールにてお申し込みください。

貴社名／雑誌等名／ご担当者名／ご連絡先／発行予定日等／希望画像番号 送付先：小杉放菴記念日光美術館 学芸課 清水 shimizu-tomomi@khmoan.jp
--

◎ 掲載する場合は、以下のキャプションを必ず記載してください。

画像1 小杉未醒《東照宮・陽明門と鼓楼》1900年代、小杉放菴記念日光美術館蔵

画像2 小杉未醒《農夫》1912（大正元）年頃、小杉放菴記念日光美術館蔵

画像3 小杉未醒《飲馬》1914（大正3）年、小杉放菴記念日光美術館蔵

画像4 小杉未醒《煉丹》1917（大正6）年、小杉放菴記念日光美術館蔵

画像5 小杉放菴《白雲幽石図》1933（昭和8）年頃、小杉放菴記念日光美術館蔵

画像6 小杉放菴《漁村夕陽》1930年代、小杉放菴記念日光美術館蔵

画像7 小杉放菴《閑庭》1950-60年代、小杉放菴記念日光美術館蔵

画像8 小杉放菴《清風》1950-60年代、小杉放菴記念日光美術館蔵

■ お問い合わせ

小杉放菴記念日光美術館 〒321-1431 栃木県日光市山内 2388-3

Tel: 0288-50-1200 Fax: 0288-50-1201 www.khmoan.jp

担当学芸員：清水友美 shimizu-tomomi@khmoan.jp